

李翎氏のコメントに対する回答

倉本 尚徳

(日本 龍谷大學・東洋大學)

李翎先生の簡潔ながらも要點を押さえたコメントに感謝申し上げます。李姪恩先生の詳しいご経歴を御教示下さり誠に恐縮です。

まず一番目の御質問からお答え致します。この問題については前稿⁽¹⁾で、北朝から隋代の紀年を有し、なおかつ「無量壽」「阿彌陀」という尊名を有する造像記を網羅的に収集し検討いたしました。以下、その後の研究で得た知見も補足してお答え致します。

「無量壽」から「阿彌陀」へという造像銘における尊名の變化については中國佛教史研究の大家、塚本善隆氏がすでに論じられています⁽²⁾。塚本氏は、「無量壽」から「阿彌陀」への變化の原因として、道綽や善導といったいわゆる淨土教の祖師たちに關する記述を中心に論じられました。塚本氏は、「無量壽」の名によってよりも、むしろ「無量光」の名の上に慈悲救済のよく現されていることや、實踐的側面として、繰り返し名號を稱念するには、「南無無量壽佛」より「南無阿彌陀佛」の方が語調もよいのみならず、呪術的な神聖性が伴われ易いこと、また羅什譯『阿彌陀經』の讀誦や書寫の普及ということを指摘されました。

私は塚本氏の指摘された點について大筋では正しいと考えてはいますが、實際の造像銘の内容の變化に即して導き出された結論ではないため、やや理念的・抽象的である感は否めません。道綽や善導といったいわゆる淨土教の祖師たちを中心に論ずるのでは、北齊王朝の時代にすでに河北地域を中心にこの變化が起こっていたことを十分に説明できないように思われます。

そこで私は、阿彌陀造像銘の時代的、地域的分布状況、あるいはその造像主に禪師が多く登場し、なおかつ、造像銘に『觀經』を典據とする語句が新たに出現していることに注目して、「無量壽」から「阿彌陀」へという造像銘の尊名の變化には、北齊の僧稠やその弟子智舜といった禪師たちの活躍による『觀經』に基づく實踐行（イメージ重視の觀想など）の普及

という要因が考えられると論じました。

「阿彌陀」という名と『觀經』の實踐ということについて、もう一つ注意すべきは、淨土三部經の中で、西方淨土への往生のために「南無阿彌陀佛」と唱えるべきことを明確に文字通り主張するのは『觀經』のみであることです。

佛教石刻について言えば、管見の限りでは、「南無阿彌陀佛」と刻まれた最初の事例は、北齊武平二年（571）木井寺觀音經碑⁽³⁾です。この石碑は現在、河北省涉縣に現存します。この寺院は太行山脈の、鄴都から陪都晉陽へと至る、皇帝が頻繁に往復したルート上にあり、『集神州三寶感通錄』にもその名が見えます。碑文の冒頭には、「南无阿彌陀佛。觀世音經一卷。諸行无常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂。天上天下无如佛、十方世界亦无比、世界所有我盡見、一切无有如佛者。□南无帝寶幢摩尼勝光如來。梵天佛。」とあります。以上のうち『觀經』、『涅槃經』諸行無常偈と、『大智度論』などにみえる弗沙佛をたたえた讚佛偈「天上天下无如佛、十方世界亦无比、世界所有我盡見、一切无有如佛者」という組み合わせはまさしく僧稠の禪觀窟である小南海石窟中窟に見えるものです。

また「阿彌陀、觀音、勢至」という阿彌陀三尊の名が刻まれた最初期の造像銘として北齊河清四年（565）白鹿山玄極寺碑⁽⁴⁾があげられます。白鹿山は僧稠の弟子筋にあたる禪師たちが多く修行している山であることは以前論じました⁽⁵⁾。

さらに僧稠の弟子、智舜の造像記と考えられるのが、武平元年（570）舜禪師造像記⁽⁶⁾です。この造像記には、舜禪師と劉氏宗門一百人が「即敬造玉石阿彌陀像并觀音大勢。白毫宛轉、與五山如爭隆、青目分明、共四海如詰朗。一一相好、不得兼二以觀之。頌德弗閑、豈復更□於餘偈」とあり、この文章は明らかに『觀經』を典據として書かれています。

以上のような諸事例から、新しい「阿彌陀」という尊名が、なぜ北齊時代河北を中心に急速に広まったかを考えると、鄴都周邊の太行山脈一帯で修行に勵み、民衆への布教も同時に行っていたであろう僧稠やその弟子、智舜のような禪師たちの存在が大きいと考えられます。僧稠は當時禪觀に最も優れた僧の一人であり、佛陀禪師が「自葱嶺已東、禪學之最、汝其人矣」と稱えた程です。僧稠は北齊文宣帝に心酔され、帝自身も禪に傾倒しました。僧稠は『涅槃經』聖行品の四念處に基づく禪觀で有名ですが、小

南海石窟の圖像から、『觀經』など、様々な經典を組み合わせる観想を行っていたことが明らかにされています⁽⁷⁾。文宣帝は僧稠を師と仰いで禪に傾倒したせいもあり、北齊の都、鄴を中心とした地域でにわか禪觀が重視されるようになりました。このような事情で、阿彌陀佛やその淨土の觀想と「南無阿彌陀佛」と唱える稱名念佛をともに含む『觀經』に基づく實踐行の廣がり「阿彌陀」という尊名の普及につながったと推測できます。

第二の御質問についてお答え致します。北朝時代の中國の神仙思想的な天を表す用語から淨土を表す用語へという大きな變化は、佛教では天に生まれかわってもまだそこは輪廻する迷いの世界であり、淨土とは異なるという認識が廣まった結果であると考えられます。第一の御質問に対する答えと重複しますが、淨土に關する用語が増加したのは、北齊時代の『觀經』に基づく實踐行の普及が造像銘の用語の變化に影響を及ぼしたことが一因と考えられます。今回は十分論じることができませんでしたが、唐代における善導の活躍も何らかの形で銘文に反映されているかと思えます。その點、今回の淨土に關する用語の分析からだけでは、十分明らかにできませんでした。今後銘文全體を通して検討することでこの問題を研究していきたいと思えます。

私の回答は以上です。李先生どうも有り難うございました。

注

- (1) 拙稿「北朝・隋代の無量壽・阿彌陀像銘——特に『觀無量壽經』との關係について」『佛教史學研究』52-2、2010。
- (2) 塚本善隆「龍門石窟に現れたる北魏佛教」『塚本善隆著作集』第2卷、大東出版社、1974。
- (3) 焦德森主編『北朝摩崖刻經研究』第3卷、内蒙古出版社、2006、280頁。
- (4) 魯一六 1023。
- (5) 拙稿「林慮山と白鹿山——北朝時代の太行山脈一帯における僧の修行地の問題について」『印度學佛教學研究』61-2、2013。
- (6) 拓 8015、百品 236。
- (7) 顏娟英「北齊小南海石窟與僧稠」(釋恆清主編『佛教思想的傳承與發展——印順導師九秩華誕祝壽文集』臺北：東大圖書公司、1995 所收)。